

甘藷の養豚飼料としての価値試験 (第 3, 4, 5 報)

細山田文男*・児玉重方*

HOSOYAMADA, H. and KODAMA, S.

On the Feeding Value of Sweet Potatoes as a Hog Feed (3, 4, 5)

3. 甘藷の煮熟の効果について

養豚飼料として甘藷を使用する場合に、煮熟する必要があるかどうかを知る為、生甘藷を甘藷突で粗碎してそのまま給与した場合と、煮熟した場合について比較試験を行った。

試験方法 ヨークシャー種♂4頭(生後140日)、試験期間は130日間、甘藷は40%配合し、前期30日間は、甘藷茎を10%使用し、後期100日間は麩と置換えて給与し、他の飼料として、米糠20、麩15(後期は25)、大豆粕10、魚粉5、コロイカル2、食塩0.5(共

に風乾比)を配合し、体重の3.5%給与した。

試験成績 飼養成績は第1表の通りである。

即ち、試験期間に生区は、煮熟区の90.4%发育したが、豚が小さい程发育に悪影響を及ぼし、中豚以上になると差が少なくなった。飼料の利用性は生区の方がやや悪かつたが、1kg増体当の経費では生区の方がやや易くつき有利となつた。

屠肉成績は第2表の通りで、屠肉率、精肉歩合及び肉の一般組成には差はみられなかつた。しかし、煮熟区の脂肪層がやや厚く、脂肪肉が僅かに多い傾向がみられた。

即ち、仔豚に対しては嗜好及び食欲の点から发育に影響するので、煮熟して給与し、中豚以上のものに対しては、飼料費及び燃料費等からみて、生で給与した方が良いと思われる。

4. 甘藷に併用する蛋白質飼料としての大豆粕と魚粉の比較について

甘藷を飼料中に50%配合し、併用する蛋白質飼料として大豆粕と魚粉を用いた場合の发育の相違につい

第 1 表 飼 養 成 績

区 分	試験開始 時体重	試験期間		1 kg 増体当り		
		増体重	指 数	給與飼料	経 費	T.D.N
煮熟区	kg 28.6	kg 57.4	100	gm 4,077	円 98.41	gm 2,930
生 区	28.4	51.9	90.4	4,335	94.48	3,116

備考：経費とは飼料費と燃料費のみである。

*宮崎県農業試験場

第2表 屠肉成績

区 分	絶 食 重 kg	内臓重 kg	屠肉率 %	精肉歩合 %	枝 肉 中 %			腎 臓 脂 肪 kg	皮 下 脂 肪 の 厚 さ cm			
					赤肉	脂肪	骨		肩	背	膜	平均
煮 熟 区 生 区	84.8	11.10	67.8	57.8	60	28	12	1.23	5.7	4.1	3.3	4.4
	78.0	10.82	66.8	57.2	60	27	13	0.87	5.0	3.7	3.2	4.0

備考：24時間絶食後剥皮による供試豚全部について調査した。

て検討した。

験期間は60日間、給与量は体重の3.5%とし、飼料は

試験方法 ヨークシャー種♀6頭(生後150日)、試 第3表の通り配合した。

第3表 飼料の配合(風乾比)%

区 分	大豆粕	魚 粉	米 糠	穀	麦 糠	甘 藷	コ ロ イ カ ル	食 塩	D.C.P
大 豆 粕 区	18	—	10	12	10	50	2	1	11.0
魚 粉 区	—	13	22	5	10	50	2	1	11.0

試験成績 飼養成績は第4表の通りである。

第4表 飼養成績

区 分	試 験 始 始 時 体 重	試 験 期 間		1 kg 増 体 当 り		
		増 体 重	指 数	給 與 料	飼 料 費	T.D.N
大 豆 粕 区	kg 43.0	kg 35.7	102.6	g 3,287	円 85.59	g 2,351
魚 粉 区	kg 41.1	kg 34.8	100	g 3,295	円 86.57	g 2,296

即ち、飼料は D.C.P 及び T.D.N がほぼ同じ様になるように大豆粕と魚粉をそれぞれ配合して給与したが、60日間では増体量に差がみられず、飼料の給与量も殆んど同じであった。飼料の利用性は魚粉区が僅かに良いが、飼料費が僅かに高くついた。

即ち、甘藷に併用する蛋白質飼料として大豆粕と魚粉では、60日間に発育の差は認められなかった。

5. 甘藷に併用する蛋白質飼料として
の大豆粕と魚粉の比較について

4報に引続いて今回も、大豆粕と魚粉を用いた場合の発育及び肉質の相違につ

いて検討した。

試験方法 ヨークシャー種♂6, ♀3計9頭を各区に♂2, ♀1に分け、今回は混合区(大豆粕、魚粉の半量づつ)を設けた。試験期間は150日間、給与量は体重の4.0~3.3%とし、飼料は第5表の通り配合した。

第5表 飼料の配合(風乾比)%

区 分	大豆粕	魚 粉	米 糠	穀	麦 糠	甘 藷	コ ロ イ カ ル	食 塩	D.C.P
大 豆 粕 区	20	—	20	5	5	50	2	0.5	11.1
魚 粉 区	—	16	20	9	5	50	2	0.5	11.6
混 合 区	10	8	20	7	5	50	2	0.5	11.3

試験成績 飼養成績は第6表の通りである。

第6表 飼養成績

区 分	試 験 始 始 時 体 重	試 験 期 間		1 kg 増 体 当 り		
		増 体 重	指 数	給 與 料	飼 料 費	T.D.N
大 豆 粕 区	kg 16.8	kg 70.5	111.0	g 3,277	円 88.81	g 2,376
魚 粉 区	kg 16.7	kg 63.5	100	g 3,365	円 93.48	g 2,322
混 合 区	kg 16.7	kg 70.6	111.2	g 3,262	円 89.52	g 2,312

試験期間の増体量は魚粉区が最も少なく、大豆粕区、混合区は、魚粉区の111%発育した。1kg増体当に要した飼料は、魚粉区が最も多く、大豆粕区と混合区は殆んど差がみられなかった。飼料の利用性は、混合区、魚粉区が僅かに良いが、魚粉区は飼料費が高くついた。

第7表 屠肉成績の2頭平均

区 分	絶食重量 kg	内臓重量 kg	屠肉率 %	精肉歩合 %	枝肉中%			腎臓脂肪 kg	皮下脂肪の厚さ cm			
					赤肉	脂肪	骨		肩	背	腰	平均
大豆粕区	84.0	10.85	67.7	58.3	54	34	12	1.31	5.3	3.7	3.8	4.3
魚粉区	76.1	8.92	69.8	59.5	57	31	12	1.17	5.3	3.6	4.0	4.3
混 合 区	82.0	9.71	69.5	59.4	50	38	12	1.53	6.1	4.0	3.9	4.7

備考：24時間絶食後剥皮による。

屠肉成績は第7表の通りで、屠肉率及び精肉歩合では大豆粕区が僅かに少ない。脂肪は混合区が最も多く、次いで大豆粕区で、魚粉区が最も少なかった。赤肉は魚粉区に最も多く、次いで大豆粕区で、混合区が最も少なかった。

即ち、甘藷に併用する蛋白質飼料として、大豆粕と

魚粉を比較したが、発育、飼料費、飼料の利用性を考えるならば、両者を混合した方が良いが、大豆粕を多く配合すると脂肪を、魚粉は赤肉を生産する傾向にあるので、豚の飼養目的によつて混合する割合を加減するのが望ましいと思われる。